

本への思いを自分の言葉で熱く語る

「私がお薦めするのはこの本です」
草津市立玉川小学校の6年1組の「総合的な学習の時間」の授業で、校内で初めての「ビブリオバトル」が行われた。これは、自分が薦める本を1人3分間（*1）でプレゼンテーションをし、その場にいる人の多数決で最も読みたい本を決めるとい

滋賀県草津市立玉川小学校

表現する力と聞く力を育む ビブリオバトル

人は、読書によって、言葉を学び、論理性を身に付け、創造力を豊かにする。

読書は人生をより深くするものとして重要であり、多くの学校で力を入れる活動の1つである。

朝読書、読書感想文、音読、読み聞かせなど、さまざまな活動があるが、

新しいスタイルの読書活動として、

全国に広まりつつあるのが「ビブリオバトル」だ。

School Data



滋賀県草津市立玉川小学校

◎ 1977 (昭和 52) 年開校。「心豊かで自ら気づき考え実践力をつけた玉川の子」を教育の基本姿勢に掲げ、防災教育や知育に力を入れる。漢字検定奨励賞を 2010 年度から 3 年連続で受賞。校長 新庄正幸先生 / 児童数 651 人 / 学級数 25 学級 (うち特別支援学級 3) / 所在地 〒 525-0059 滋賀県草津市野路 9-6-12 TEL 077-563-1271 / URL <http://www.tamagawa-p.skcc.ed.jp>

うゲーム形式の書評合戦だ。今回は 3 人の子どもが発表者となり、面白かった場面や選んだ理由などをそれぞれ紹介した (写真 1)。「本は文字が書いてあるだけなのに、目を閉じるとその風景が浮かんできました」。「続きをどんどん読みたくなりました」。「結末には皆さん、驚くと思います」など、本を読んで自分が感じた魅力を熱く語る。続いて、2 分間の質問タイムだ。子ども

もたちは次々に手を挙げ、担任の折居幸子先生が順番に指名していく。「内容を想像できるようにあらすじを話しているのがよかったです」「ユーモアを交えながら話していたので楽しかったです」という感想以外にも、「読むのにどれくらい掛かりましたか」「本を読んで、自分が変わったと思うことはありますか」などの質問も投げ掛けられた。発表者が「じっくり読んだので 1 か月掛かりました」「私はこんなところが変わりました」と答えると、子どもたちはうなずき、また次の手が挙がる (写真 2)。

最後に、3 冊の中から一番読みたくなった本をクラス全員がそれぞれ選び、「チャンプ本」を決めた。授業後、発表者の周りに子どもたちが集まり、紹介された本を手にとって、「図書館にあるかな?」「他にどんな本が面白かった?」など盛り上がる。折居先生は授業を振り返ってこう話す。

「質問タイムが予想以上に盛り上がり、驚きました。発表者は以前にビブリオバトルを経験していたので大丈夫だと思いましたが、質問タイムでは質問が出ないかと不安でした。子どもたちは発表をしっかりと聞き、感じたことを伝え、互いの考えを深められていました」

本を介した新しいコミュニケーション

ビブリオバトルは、立命館大の谷口忠大

*1 ビブリオバトルの公式ルールでは発表は1人5分だが、小・中学生の場合、「ミニ・ビブリオバトル」という名称で、3分で行うことがある



草津市立玉川小学校校長

新庄正幸

しんじょう・まさゆき 「子どもの心が動く教育活動を積み重ねていきたい」



草津市立玉川小学校

折居幸子

おりい・さちこ 6学年担任。「話し合い活動を大事にして、一人ひとりが自分らしくいろいろな学級づくりを心掛けている」



草津市教育委員会

清水康行

しみず・やすゆき 教育部副部長。「市と学校の緊密で良好なつながりを築いていきたい」



草津市教育委員会

中村真理子

なかむら・まりこ 学校教育課専門員。「学校と連携し、市全体の教育力向上に注力したい」

*プロフィールは2014年3月時点のものです



写真1 3分間で本の魅力を紹介。どの子どもも手元に原稿を用意せずに話す。聞き手も、発表者を見て、真剣に耳を傾ける。教壇の横にはタイマーがセットされ、3分経ったら途中で終わりとするのがルールだ



写真2 2分間の質問タイムでは、子どもたちから多くの手が上がった。自分のスピーチに対して、すぐにリアクションが返ってくる。発表者と聞き手の双方のコミュニケーション力を育む場になっている

准教授によって2007年に考案された。10年頃から全国的に広まり、今では学校、図書館、自治体、企業など、さまざまな団体が開催している。

公式ルール（P.24図）を持つビブリオバトルだが、その特徴は最後に「チャンプ本」を決めることにある。発表者は、勝つために本の魅力を伝えるプレゼンテーション力はもちろんのこと、みんなが読みたくなる本を選ぶという社会的視点も求められる。聞き手は、1票を投じる責任から積極的に耳を傾け、聞く力や思いを受け取る力が養われる。そして、質問タイムによって、発表者も聞き手もいろいろな人の視点が分り、多様な価値観に気付く。このように、

「孤読」になりがちな読書が、コミュニケーションを生む活動となる。授業を参観した新庄正幸校長は、教室全体が活気に満ちていたと話す。

「発表者の3人は、事前に原稿を用意して練習していましたが、本番ではそれを読み上げるのではなく、その場で感じた自分の言葉で話していました。聞き手も、その生き生きとした様子に引き込まれてしつかり聞いていましたし、だからこそ、鋭い質問も出てきたのだと思います」

新庄校長は、子どもにも児童集会などで準備した原稿を読み上げるのではなく、原稿なしスピーチをすることを呼び掛ける。校長自身も、式典や集会では原稿を持たずに

子どもの反応を見ながら式辞や講話を述べており、自らの姿で手本を示しながら、子どもたちの意識を変えようとしている。

折居先生は、クラスを受け持った4月から、学級づくりの土台として話し合い活動に力を入れてきた。その成果がビブリオバトルにも表れていたと言う。

「自分の思いを伝え、友だちの思いを受け止めることを大事にしてきました。質問タイムが活発だったのは、何度も話し合い活動を体験し、安心して自分の思いを伝えられるようになっていたからだと思います」

市でイベントを開き、周知を図る

玉川小学校がビブリオバトルを始めたのは、草津市の「学校図書館活用推進事業」の一環として推奨されたことがきっかけだ。この事業では、各小・中学校に学校司書や運営サポーター、学校図書館ボランティアを配置。日常的に子どもに図書支援が行えるようにして、子どもの主体的な学習活動を支援する場や、情報活用能力を高める場としての学校図書館の価値を高め、豊かな心の育成と学力向上を図っている。

事業のキャッチフレーズが「オール草津で子どもを育てる」ともつと本を読む子どもを育てる。家庭で、学校で、図書館でであるように、保護者や地域と連携していることも特徴だ。ビブリオバトルも、考案者



写真3 「くさつビブリオバトル 2013」に、玉川小学校からは6年生3人が3つのグループに分かれて参加。1人はチャンプ本に選ばれた

図 ビブリオバトル公式ルール

- ① 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる
- ② 順番に1人5分間で本を紹介する
- ③ それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に開するディスカッションを2～3分行う
- ④ 全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなかったか？」を基準とした投票を参加者全員1票で行い、最多票を集めたものを「チャンプ本」とする

出典／知的書評合戦ビブリオバトル公式ウェブサイト(*2)

が在籍する立命館大が市内南部にあり、市と大学とが連携協定を結んだことから、積極的に推し進められるようになった。

市教委は、まずビブリオバトルを市民に周知しようと、13年11月、市の行事の1つ「みなくさまつり」において、「くさつビブリオバトル2013 みなくさの陣」を開催した。発表者は、小学生、中学生、一般・高校生、大学生の部に計50人。参観は自由であり、会場にはさまざまな年代の人々が集まった。イベントを企画・運営した草津市教育委員会の中村真理子専門員は、会場の様子を次のように振り返る。

「質問タイムでは会場からさまざまな質問が飛び出し、本を介して地域の人々の世

代を超えた交流が見られました。また、小学生や中学生が大学生のレベルの高い発表に驚いたり、逆に中学生が小学生のしつかりした発表に感心したりと、異年齢同士で刺激を与え合う場にもなっていました」

子どもの心に火がついた

小学生の部の発表者は16人。3グループで行われ、玉川小学校からは冒頭に紹介した3人が参加した(写真3)。

「本校の学校司書がイベントの説明をして参加者を募った際に、立候補したのがこの3人でした。3人とも本が好きで積極的な姿勢をうれしく思いました」(折居先生) 学校司書が見本として発表したところ、本の舞台に行きたくなるような内容で、しかも、原稿や時計を見ずに3分きっちりで終えたことに3人は感動していたという。

「単に感想を話せばよいと考えていた3人は、その発表に衝撃を受けたのでしよう。『チーム玉川』と名乗り、連日、司書の方にアドバイスを受けながら、聞き手の心に訴え掛けるにはどうすればよいかと、話す内容を考え、発表の練習を重ねていました。原稿を持たずに発表することにも、ためらわずに挑戦していました」(新庄校長)

このイベントを契機に市内の小・中学校にビブリオバトルが広まり、玉川小学校以外でも授業などで行われるようになった。

草津市教育委員会教育部の清水康行副部長は、その成果をじわりと感じている。

「最近、小・中学校を訪れると、自分たちの思いを生の声で伝え合う場面が増えていると感じます。ある中学校では、創立記念行事の1つが生徒自身の手で企画・運営されていました。これは、今後、社会に生きる上で大切な力になります。ビブリオバトルは、そうした社会参画力にもつながる活動と捉え、イベントの実施などで学校を支援していきたいと考えています」

読解力、思考力、プレゼンテーション力を伸ばし、互いを尊重し、認め合う態度を育む道徳教育の場にもなるビブリオバトル。13年5月に文部科学省が発表した「第三次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」の中で、ビブリオバトルは「読むことにとどまらず、言葉の力や表現力を競う新しい取組」とされ、「普及することが望まれる」と明言されている。玉川小学校でも今後、全校に広めていく考えだ。新庄校長は改めてこう話す。

「授業後、自分もやってみようという子どもが大勢いました。思いを伝え、受け止められる。そうした喜びを感じられる活動だと、3人を見て思ったのでしよう。そうした子どもの心に火がつく学びを今後もどんどん取り入れ、子どもの主体性を引き出していきたいと思っています」

*2 詳しくは右記ウェブサイト (<http://www.bibliobattle.jp>) を参照ください

豊かな心の育成と学力の向上を目指し 読書活動を推進

「オール草津」で読書活動を支援

草津市は、基本理念に「子どもが輝く教育のまち・出会いと学びのまち・くさつ」を掲げ、「子どもの生きる力を育む」「学校の教育力を高める」「地域に豊かな学びを創る」という施策方針の下、教育事業を展開している。軸となるのは「学校改革推進事業」だ。市として共通の重点的な取り組みがある一方、各校が教育改革のモデルとなるプランにチャレンジする。三木逸郎教育長は次のように話す。

「個々の学校の教育力を高めるためにも、それぞれが自校の特色や地域性に即した活動を行い、互いの良さを学び合える環境を整えるようにしています」

共通の施策には、漢字検定や英語検定の受検費用を半額補助し、市の全児童・生徒が受検する「各種検定事業」、市内全小・中学校の全普通教室に電子黒板、プロジェ



草津市教育委員会教育長
三木逸郎 みぎ・いつろう

立命館大BK C事務局副局長、滋賀医科大学長補佐、滋賀県立大学理事長補佐等を経て、08年10月から14年3月まで教育長職を務める。

滋賀県草津市

人口約12万7500人。小学校13校、中学校6校。県内第2の人口を有するベッドタウン。20年前に立命館大BK C（ひわこ・くさつキャンパス）が設置され、大学を生かした街づくりが進められている。

*プロフィールは2014年3月時点のものです

クター、書画カメラを設置する「ICT授業の推進」、各界の第一人者を招いた「スペシャル授業in草津」などを行う「学力向上重点事業」などが挙げられる。学校はこれらの教育施策を行いながら、自校の重点活動を決め、特色化を図る。例えば、玉川小学校では、漢字検定の受検を推進して高い合格率を上げたり、独自に年数回のスペシャル授業を行ったりしている。

ビブリオバトルが推進されている「学校図書館活用推進事業」は、「学力向上重点事業」の1つに位置付けられる。事業では学校司書教諭の専任化を目標としている。

「子どもの活字離れが指摘されて久しいですが、市では図書館の機能を充実させることで、子どもの読書活動を支援しています。人的支援以外にも、書籍のバーコード管理を導入し、貸出をやすくしました。読書は、心を豊かにし、学力向上に結び付く重点施策と捉えています」（中村専門員）

更に、絵本の読み聞かせと演奏を行う「ブックトークコンサート」、乳児に絵本をプレゼントする「ブックスタート」など、「オール草津」として市全体で読書活動を推進している。

市民の理解を得るための広報が必要

このように、教育委員会では人的、設備的に学校支援の充実を図っている。橋川涉

市長は重点施策の1つに教育・福祉を掲げており、教育関係の予算は三木教育長就任以降、1.5倍に増額した。

また、財源となる税金を納める市民や、学校とかわりを持つ保護者に対して、「学校で行われる活動への理解を得る仕組みが必要」との考えから、各校には学校活動の積極的な発信を推奨している。

「良い活動であっても、学校外の人たちがその意義を理解していなければ、結局は学校が何をしているのか分からずに、協力しにくかったり、何かのトラブルの際には不信任が募ったりします。管理職の先生には、『自分の学校について自慢し、多くの人に知ってもらうことも職務です』と伝えていきます」（三木教育長）

新聞社を招いて管理職研修を行い、広報マインドを浸透させた。更に、学校と市教委が連携して情報提供に力を入れてきた結果、草津市の学校が新聞などに取り上げられる回数が増えたという。こうして学校外からも新しい発想が寄せられるようになり、学校活動は充実度を増している。

「ビブリオバトルを見学した教育関係者は、自分の思いを堂々と話す子どもたちの姿に感激していました。市はこれからも子どもの学ぶ意欲を伸ばすための活動を、職員全員で知恵を出し合い、学校と連携しながら実施したいと思います」（清水副部長）